



**Data**

監督・脚本：内田英治  
出演：窪岡萌希 / 窪岡瑞希 / 忍成修吾 / 菅田俊 / 菜葉菜 / 榊英雄

---

---

---

---

---

---

---

---

## 👁️👁️ みどころ

情報はチラシ1枚のみ。前評判はゼロ。そんな映画でも、ホクテンザではたまにこんな掘り出しモノが！格差、格差と騒ぐのは嫌いな私だが、少女期にこのような絶望的な状況に置かれたら・・・？8歳と6歳で姉妹となってから7年。15歳と13歳で家出をした2人を待つ東京新宿での現実はどこで、どのように歯車が狂ったのか？なぜ悪いことをしていない2人が逃げに逃げなければならないのか？2人だけの逃避行はホントに実現できるのか？安モノのテレビドラマではない、こんな「ホンモノ」をしっかりと鑑賞しよう。

\* \* \* \* \*

## これは掘り出しモノ！

新聞紙評でも取りあげられず、試写上映もない映画の中にも、たまに掘り出しモノがあるものだが、『地球でたったふたり』はその典型。ケータイ小説の映画化をはじめ、最初から観客受けだけを狙った安っぽいテレビドラマ的邦画が氾濫している今、内田英治監督の本作は多くのキレイゴトを排し、これでもか、これでもかと問題の本質を掘り下げていった問題提起作！

『地球でたったふたり』の15歳の姉アイ（窪岡瑞希）と13歳の妹ユイ（窪岡萌希）が生きていくのは大変なこと。大都会東京の新宿の町で、「逃げて、逃げて、どこまでも逃げろ」という中年ヤクザの谷田（菅田俊）が残した最後のセリフどおり、2人は絶望的な状況の中逃げに逃げたが、その行き着く先は？

こんな「掘り出しモノ」の一作を、大阪でたった一館だけ上映してくれた天六の場末にあるいつも観客ガラガラの映画館「ホクテンザ」に感謝！

## まずは16歳で子供を産むことの是非論から

2008年末に急浮上してきた「派遣切り」問題を典型とする労働問題、雇用問題は2009年当初の日本最大の政治的テーマ(争点)となりそう。大正時代には河上肇の『貧乏問題』があり、昭和49年には『昭和枯れすすき』という大ヒット曲があったが、時代が昭和から平成に移り平成21年を迎えた今、この映画冒頭にもみる6歳の女の子ユイの悲惨さにまずビックリ。

16歳の時にユイを産んだ母親(菜葉菜)は現在22歳。仕事はホステスのようだが、たった1人アパートの部屋の中に残された6歳の女の子は、じっと母親の帰りを待つしかないようだ。お腹がすいたユイは食パンを発見するが、これはカビが生えておりとても食べられるものではない。次に見つけたのはビンの中に入っているお菓子だが、これも既に干からびており、少しずつポリポリとかむ音が静かな部屋の中に響いていく。

これはまさに平成貧乏物語だが、1920年代後半から30年代にかけての日本の大恐慌時代と異なる特徴は、お金がない、食べ物がいないという物質的な貧乏以上に、親子の絆、友人の絆などユイには人間の絆が何もないこと。6歳といえば、小学校入学を控え毎日楽しく幼稚園や保育園に通っていなければならないはずだが、ユイはそんな境遇にないからそんなお友達は1人もいないはず。母親が16歳で子供を産んだ事情をとかく言うつもりはないが、『JUNO/ジュノ』(07年)や『コドモのコドモ』(08年)のような「成功例」はまれ?

この映画を鑑賞するについては、まずは16歳で子供を産むことの是非論から・・・。

## 女が女なら、男も男

部屋に戻ってきたユイの母親はえらく陽気で機嫌がいい。それは、新しい男が見つかり、今日からこの部屋に転がり込んでくるため。しかも、ユイに対してこの男(榊英雄)は、「今日からユイのパパになるからね」と紹介される。普通ならユイはここで「えー」と驚くところだが、既に母親に対する心が凍りついているユイにはそんな驚きも疑問も出て来ないよう。もっとも、男の連れ子だというアイを紹介された時はユイもさすがにビックリしたよう。そして最初に目と目を合わせた時、6歳のユイと8歳のアイは互いの孤独を理解し合えるのは、この2人しかいないと直感したようだ。

普通は、離婚した場合子供は妻が引き取るものだが、そうならず男がアイを連れ子としているのは、きっと前の女房に逃げられたため。そんな予感はその後の2人の夫婦生活(?)の中で少しずつ明らかになるが、ひどいのは男が平気で8歳のアイに暴力をふるうこと。6歳の娘を部屋の中に放り放しにして夜の世界で派手な生活を続ける女も女だが、連れ子と共にそんな女の部屋に転がり込み、まともな仕事にも就かず、昼間からマージャンばかりやっている男も男。

昭和60年代生まれの日本の若者たちは、成長して今一体どんな大人になったの？

## それから7年・・・

子持ち同士の親の結婚によってアイとユイは姉妹になったわけだが、それから7年。そんな地獄のような家庭にあっても、アイは15歳、中学3年生に、そしてユイは13歳、中学1年生になっていた。女の子にとってこの年頃は肉体的、精神的に最も変化する難しい年代だが、アイもユイも両親に対しては完全に心を閉ざしていたし、友人にも心の繋がりを求めず、2人が心を通わずのは自分たち2人だけ。したがって、2人はいつも一緒。そんな状態がいつまで続くのかは疑問だが、少なくともアイとユイにとって2人であることができる時間がたくさんあるこの時代は、いくら親から冷たい仕打ちをされてもそれなりに幸せだったはず。しかし、ケンカが絶えない親たちの離婚話が現実になってくると・・・。

## とある地方都市から東京へ

2008年末にはそれまでずっと角をつき合わせていた、地方分権を主張する地方分権改革推進委員会の丹羽宇一郎委員長と道州制を主張する道州制ビジョン懇談会の江口克彦座長の会談が実現したが、あるべき地方分権や道州制が実現していれば、とある地方都市に暮らすアイとユイが家出した後、あえて東京に向かう必要はなかったはず。

両親の離婚必至、そうなればこの7年間誰よりも強い絆で結ばれていた2人の絆が引き裂かれること必至と悟ったアイとユイは家出を決行。その向かう先が東京の新宿となったのは、多分それが2人にとって最も有名な地名だったから。後にヤクザの谷田の故郷が沖縄だということが明らかとなり、2人は谷田から沖縄への飛行機の切符をクリスマスプレゼントとしてもらうのだが、15歳と13歳の2人が家出の際行き先が東京ではなく沖縄という選択肢を持っていれば、きっと2人の人生が幸せに展開する可能性が高かったはず。だって、かつてクールファイブが『東京砂漠』を歌ったように、大都会東京で15歳と13歳の家出少女が一体どんな幸せをつかめるというの？そんな可能性は1%もないはず。現にヤクザの谷田と出会わなければ、2人の人生は15歳と13歳でジ・エンド・・・？

## 会計士も悪いが、アイもダメ！

夢を描いて上京したが、挫折した若者たちは多い。しかし、2008年の紅白歌合戦で大トリをつとめた氷川きよしのサクセスストーリーや、シャ乱Qのつくくの成功物語もある。さらに、団塊世代には懐かしい、井沢八郎が歌った『ああ上野駅』の心にしみる歌詞もある。このように、アメリカンドリームならぬ東京サクセスストーリーを実現する可能性はゼロではないが、中学3年生のアイと中学1年生のユイが何の頼りも、何の計画もなくいきなり東京にやって来ても、平成の日本国ではまともな生活は到底ムリ。せいぜい新宿警察の家出係に保護されて両親の元へ返されるか、違法を承知で中学生の女の子を雇

ってくれる水商売か風俗の世界で生きていくのがやっと、というのが現実。現に16歳でユイを産んだ母親は、アイと同じ15歳の頃には水商売でしっかり働いていたはずだ。

路上に座るアイに声をかけてきたのは、暴力団の会計士をしている男(飯島大介)、弁護士の私はたくさんの会計士を知っているが、18歳未満とわかっていてお金でホテルに誘うような悪徳会計士は見たことがない。もちろん、私を含めてそれに近いようなスケベ弁護士やスケベ会計士はたくさんいるが、専門家としてのプライドを持っている以上、そこまでのめり込むのはよほどのことがなければできないはず。

もっとも、大阪弁護士会の少し先輩で年賀状のやりとりもしていた小川真澄弁護士が昨年末あれほどマスコミを騒がせたことを考えながら、この会計士がヤクザの若き組長(忍成修吾)にあごで使われている様子を見ると、仕事にあふれた会計士はこんな生きざましかできないのかも・・・?しかしそれにしても、命と同じように(命以上に)大切な組の秘密帳簿が入った鞆を持ったままで中学生の女の子に買春を仕掛けるとは、この会計士はかなりバカ。また、それはそれで仕方ないにしても、連れ込まれたラブホテルの部屋から何が入っているかも確かめないまま、鞆を奪って逃げるアイもアイ。そこまで覚悟を決めてラブホテルに入るのなら、現金の有無くらいは確かめたうえで、盗むものを盗まなければ・・・。

## 中年ヤクザの悲哀の描き方は見事!

1971年ブラジル生まれの内田英治監督は、10歳で帰国後映画鑑賞に明け暮れる中、映画監督を目指したらしい。そんな監督がなぜヤクザ社会の内幕や中年ヤクザ谷田の悲哀を理解しているのか不思議だが、この映画におけるヤクザの若き組長と彼の坊っちゃん時代の世話をしてきた「ジジイ」と呼ばれている中年ヤクザ谷田やその弟分(弓削智久)らの描き方は絶品。

谷田の表向きの仕事は雀荘のマスターだが、組に属している以上組長の命令は絶対。他方、組の裏帳簿が家出少女に奪われたというのは若き組長にとって大事件。したがって、たまたまラブホテル内に残されたアイとユイが映っているポラロイド写真を唯一の手がかりに2人の家出少女を見つけ出すことは組長にとっては至上命題。それなのに、駐車場の一角で2人を発見した谷田が、あえて2人を見逃したうえ、病気のユイを医者につれていったり自分の家に連れて帰ったのは一体なぜ?

内田英治監督のこの映画はトコトン非情で冷酷なヤクザ社会の現実をヴィヴィットに描き出すが、その反面必ず現実に存在する谷田のような人間にスポットライトをあてたのが救い・・・。

## この女優に注目!

この映画最大の成果は、女優探しの名人と言われる張藝謀(チャン・イーモウ)監督が

『紅いコーリャン』(87年)で鞆俐(コン・リー)を、『初恋のきた道』(00年)で章子怡(チャン・ツイイー)を、『あの子を探して』(99年)で魏敏芝(ウェイ・ミンジ)を発掘したように、ユイ役で窪岡萌希を、アイ役で窪岡瑞希を発掘したこと。名前からわかるように2人は実の姉妹で、TVドラマや映画で既にかなり活躍しているらしい。

アイ役の窪岡瑞希もいいが、私が注目するのはユイ役の妹の窪岡萌希。これは、すごい若手演技派女優として私が早くから注目していた宮崎あおいが2008年のNHK大河ドラマ『篤姫』への出演によって全国津々浦々に知れわたり、日本を代表する若手女優となってしまった今、私が推す次の注目女優はこの窪岡萌希。1992年生まれの彼女はまだ17歳。これからの成長と大ブレイクが楽しみだ。

## クールでニヒルな忍成修吾もいゝ味を

小泉純一郎元総理が国会議員を引退し、地盤を次男進次郎に受け継がせたこと、そしてまた、「親バカ」ぶりを自認したことが非難されている。また、言うまでもなく現在の日本の政治家は麻生太郎、小沢一郎、鳩山兄弟など世襲議員が大きな顔をしているのが現実。このように政治家に世襲が多いのは、長年にわたって形成されてきた人脈や地盤を引き継がせたいと願うから。すると、そんな思惑はヤクザだって同じ。だって、政治家もヤクザもやってることは違っても、目的のための組織づくりのあり方やお金のシステムは似たようなものだから。

そこで面白いキャラとして登場するのが、谷田から「坊っちゃん」と呼ばれているクールでニヒルな組長の2代目北村だが、これを演ずる忍成修吾が実にいゝ味を出している。特別な才覚を持っているわけではないのに、2代目としての権力の使い方だけは心得ているのは不思議だが、やっと追いつめたユイから帳簿のありかを聞き出すのに、あんなに暴力をふるわなくてもいいのでは？さらに、「ガキだからって容赦はしないぞ」と脅しつけておきながら、そんなガキのちょっとした知恵に騙されてしまうのも2代目らしい知能レベルの低さ・・・？

忍成は2代目組長とは思えない端正なマスクだけに、そのクールとニヒルさが目立つが、やはり2代目として組を率いていくにはもう少し苦勞して人の氣持を理解できるようにならなければ・・・。

## どこまで逃げるられるの？

アイとユイが谷田の元で匿われていることが判明したのは、1枚のボラロイド写真から。おカマ男(関根信一)を含め、ささやかながらも楽しいクリスマスを祝おうとしていた日は、たちまち「天国から地獄へ」と化したわけだが、坊っちゃんが谷田を撃った拳銃がその後大きな役割を果たすことになるから、そんな小道具に注目！

忘れたマフラーを谷田に届けに出たアイが悲惨な現場を目撃したのに対し、谷田の家で

はユイがみんなの帰りを待ちながら、クリスマスツリーの飾りつけをしていたが、そこに乗り込んできたのが坊っちゃん。そんな絶体絶命の状況の中、さて2人はどこまで逃げられるの？2人を追うのはヤクザ組織だけではなく、殺人事件に発展した中、面子をかけて乗り出してきた警察組織。とある大きなビルの中で力尽きようとしていた2人だったが、そこで、ほとんど虫の息状態のユイからアイに出された提案とは？

昨年12月12日に観た『チェ 39歳 別れの手紙』(08年)では、ゲバラがどんどん絶望的な状況に追い込まれ遂には射殺されてしまう結果はわかっていながらどうしようもなく悲しい気持ちになってしまったが、それは歴史的な事実だから仕方なし。しかし、あくまでフィクションとしてのこの映画では、2人はどこまで逃げられるの・・・？

2009(平成21)年1月5日記

## 作品の二極化、客層の二極化を考える

08年に公開された邦画は全部で418本、総興行収入は1158億円(洋画を含むトータル1948億円の約6割)、興行収入の断トツは『崖の上のポニョ』の155億円で、ベストテンは『花より男子ファイナル』『容疑者Xの献身』『相棒』『20世紀少年』などテレビ局絡みの作品が独占している。他方、10億円以上の28本で興行収入の4分の3近くを占めているから、残りの4分の1を400本弱で細々と分け合っていることになる。さて、ここから読み解くキーワードとは？

それは、第1に作品の二極化。つまり、テレビ局の主導で圧倒的人気を博し興行収入をあげる作品と、名作・佳作・快作・問題作ながら宣伝力が弱いため興行収入をあげられない作品との二極化だ。もっとも、アカデミー賞外国語映画賞を受賞した『おくりびと』(11位、30億円)をはじめ『母べえ』(15位、2

1億円)『明日への遺言』(43位、6億円)などの話題作、さらに『アフタースクール』(45位、5.5億円)『百万円と苦虫女』(55位、3億円)などの佳作はベスト60位に入っているが、『地球でたったふたり』が数億の興行収入をあげるのはまず不可能？

第2に、テレビの大量宣伝に乗るのは若者世代、単館中心の名作を観るのは中高年層と明確に客層が分離していること。アホバカバラエティー番組の氾濫は目に余るが、映画までテレビ局主導では近い将来飽きられてしまうのでは？

そんな状況下、私が『地球でたったふたり』を発見したことを大いに喜びたい。若者たちもテレビからの受身的情報だけではなく、主体的に広く情報を収集してこんな隠れた(?)映画を見つけ、そのすばらしさを見抜く目を養うことが必要なのでは？

2009(平成21)年6月2日記